抑うつおよび不安の記憶バイアスに関する実験的検討

川上　彩子*・松田　英子**

要　約

先行研究では，否定的情報の処理に関する記憶バイアスが抑うつの生起や維持に，強い影響力を持つと指摘されている。本研究は，自己関連づけ課題と偶発再生課題を使用して抑うつと同時に不安の顕在記憶バイアスを検討し，否定的情報に加え，肯定的情報に関しても検討した。その結果，(a) 非抑うつ者，非不安者それぞれにポジティブな記憶バイアスがみられ，(b) 自己関連情報に限れば，非抑うつ者のポジティブ記憶バイアスのみが見られ，不安に関してはいずれのバイアスも見られなかった。これらの結果は，抑うつ傾向者・不安傾向者は，顕在記憶課題において偏りのない現実的な情報処理を行っていることが示唆された。

キーワード：顕在記憶バイアス，抑うつ，不安，自己関連づけ課題，偶発再生課題

1．問題と目的

抑うつや不安の強い者は情報処理の過程で特定の偏り，即ち認知バイアスを示し，これがそれぞれの否定的感情の生起や持続に関連している（福井，2002）。例えば，高抑うつ者は否定的な出来事を記憶しやすく（福井, 2002), 一方高不安者は，中性刺激に比べ脅威刺激の記憶成績が高い（寺澤・上田，2011）。特に記憶バイアスに関しては，抑うつと不安に差異があるとする研究が多い。顕在記憶研究では，不安傾向によるバイアスはみられず，抑うつ傾向によってのみ否定的な認知バイアスがみられた（cf. Derry & Kuiper,1981）。一方，潜在記憶研究では，抑うつ傾向によるバイアスはみられず，不安傾向のみで否定的なバイアスがみられるという結果が多く報告されている（cf. Danion, Kauffmann, Grange, Zimmerman & Grange,1995）。しかし抑うつと不安の両方の潜在記憶バイアスを検証したのは坂元（1998）のみである。

また，本邦では否定的刺激を用いた認知バイアス研究は多く行われているが，肯定的刺激との対比が重要という指摘がある（西口・丹野，2012）。非抑うつ者の肯定的な認知バイアスを確認した研究は鳥丸（2009）と坂元・坂元（1998）の他ほとんどない。

本研究では，自己関連付け課題と偶発再生課題を用いて，抑うつと不安の双方を取り上げ，顕在記憶バイアス（全般および自己関連情報）について検討する。抑うつに関する鳥丸（2009），坂元・坂元（1998）の知見の追試に加え，本研究では新たに不安傾向による自己認知バイアス，および肯定的刺激と否定的刺激の提示による不安傾向の顕在記憶バイアスを検証する。

2．方　法

2-1. 刺激の予備調査

大学生 20 名を対象に，本実験で使用する性格特性形容語の選出のための予備調査を実施した。日常の使用頻度の評定を求め，これの影響を抑制した。具体的には，鳥丸（2009）の 46 対 92 語について，各語の日常での使用頻度を 5 段階で回

2013 年 11 月 30 日受付
* 日本福祉教育専門学校　精神保健福祉学
** 江戸川大学　人間心理学科教授　臨床心理学

答を求めた。そのうちアクセシビリティが均一な13対26語を抽出した。

2-2. 本実験

2-2-1. 実験協力者および手続き

大学生23名（男性13名，女性10名，平均年齢21.30 ± 1.06歳）を対象に，個別で実施した。教示後，BDI - Ⅱ日本語版（以下BDI；Beck, Stree, & Brown,1996 訳 小嶋・古川，2003），STAI特性不安尺度（以下STAI；肥田野・福原・岩脇・曽我・Spielberger，2000）の質問紙に回答を求めた。実験方法の説明と本実験では未使用の中性語を用いた練習試行を行ってから，本実験として自己認知バイアスを測定するための自己関連付け課題，その後顕在記憶バイアスを測定するための偶発再生課題を実施した。

実験は，刺激非表示の画面を5秒間提示，性格特性形容語を1語ずつ1秒間提示，刺激非表示3秒間後，直前に提示されていた語が自身に当てはまるか否か2件法による口頭での回答を求め，実験者が記録した。画面は26語毎に自動で切り替わるよう設定し，実験協力者の意識が逸れないよう刺激提示時の合図としてアラームが鳴るよう設定した。自己関連付け課題終了後，提示された刺激のうち覚えているものを紙面に書き出す偶発再生課題を行った。倫理的配慮として，回答は強制ではなくいつでも中止できること，個人情報の保護について教示し，練習試行前に同意書に記入を得た。

2-2-2. 実験デザイン・分析方法

BDI, STAI得点を各カットオフポイント（Beck et al,1996；肥田野ら,2000）に基づいて2群に分類し，独立変数とした。BDI得点10点以下を非抑うつ群（13名），11点以上を抑うつ傾向群（10名；内17点以上の高抑うつ者2名）とした。STAI得点45点以下の男性，41点以下の女性を非不安群（14名），54点以上の男性，51点以上の女性を不安傾向群（9名）とした。その結果，非抑うつかつ非不安者は6名，非抑うつかつ不安傾向者は4名，抑うつ傾向かつ非不安者は3名，抑うつ傾向かつ不安傾向者は10名であった。

従属変数として，以下の8変数を算出した。①自己の性格特性形容語得点（肯定・否定），②偶発再生数，③偶発再生した肯定語・否定語の数各々を偶発再生数で除算したものを性格特性形容語再生率（肯定・否定），④自己関連付けした語の再生数の総和を偶発再生数で除算したものを自己関連語再生率とし，⑤性格特性形容語得点を自己関連付けした語の再生数の総和で除算したもの自己関連語内再生率（肯定・否定）とした。比率の変数は分析の際に逆正弦変換を行った。

3．結　果

3-1. 自己認知バイアスの分析

幼性格特性形容語得点の平均値と標準偏差をTable1に示した。

性格特性形容語得点（肯定的・否定的）と抑うつ群（非・傾向）の2要因分散分析を行った結果，有意な交互作用がみられた（F（1,21）=6.88,p<.05）。単純主効果を行った検定の結果，肯定語得点においては抑うつ群による差はみられないが，否定語得点においては非抑うつ群よりも抑うつ傾向群の方が有意に高かった（F（1,21）=0.31,$n.s.$；F（1,21）=11.14,p<.01）。また，非抑うつ群において肯定

Table1　各抑うつ群・不安群の性格特性形容語得点および自己関連語内再生率の平均（SD）

	性格特性形容語得点		F値	自己関連語内再生率 注1		F値
	ポジティブ	ネガティブ		ポジティブ	ネガティブ	
非抑うつ群	7.53（2.11）	4.92（1.80）	11.14**	56.66（12.45）	33.34（12.45）	15.51**
抑うつ傾向群	6.40（2.01）	6.90（1.79）	0.31	43.74（ 7.69）	46.26（ 7.79）	0.14
非不安群	7.57（2.31）	5.42（2.14）	6.92*	50.02（10.99）	39.98（10.99）	0.24
不安傾向群	6.22（1.48）	6.33（1.80）	0.05	52.64（14.70）	37.36（14.70）	0.24

注1：平均値と標準偏差は逆正弦変換後のもの　　**p<.01

語得点が否定語得点よりも有意に高く（F (1,21) =11.14,p<.01），抑うつ傾向群においては性格特性形容語得点の差は有意でなかった。(Figure1)

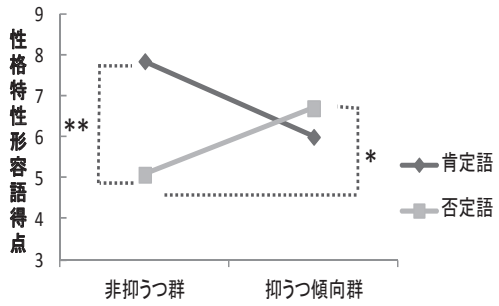

Figure1　性格特性形容語得点の抑うつ群別比較
**p<.01，*p<.05

性格特性形容語得点（肯定的・否定的）と不安群（非・傾向）の２要因分散分析を行った結果，交互作用に有意な傾向がみられた（F(1,21) =3.02,p<.10)。単純主効果の検定を行った結果，肯定語得点，否定語得点ともに不安群による差はみられなかった（F(1,21)=0.05,$n.s.$；F(1,21) =0.05,$n.s.$)。非不安群において，肯定語得点が否定語得点より有意に高かったが（F(1,21) =6.92,p<.05)，不安傾向群の性格特性形容語得点の差は有意でなかった(F(1,21)=0.05,$n.s.$)。(Figure2)

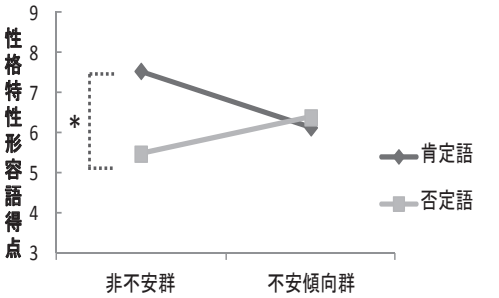

Figure2　性格特性形容語得点の不安群別比較
*p<.05

以上の結果として，非抑うつ群および非不安群は肯定的な自己認知バイアスを持つことが示された。

3-2. 記憶バイアスの分析

3-2-1. 偶発再生数の分析

偶発再生数を従属変数として抑うつ群（非・傾向），不安群（非・傾向）毎の１要因分散分析を行った結果，抑うつ・不安傾向により偶発再生課題における記憶量に差はみられなかった(F(1,21) =1.87,$n.s.$；F(1,21)=.97,$n.s.$)。

3-2-2. 自己関連語再生率の分析

自己関連語再生率を従属変数として抑うつ群（非・傾向），不安群（非・傾向）毎の１要因分散分析を行った結果，抑うつ・不安傾向により自己関連語再生率に差はみられなかった。(F(1,21) =.61,$n.s.$；F(1,21)=.17,$n.s.$)。

3-2-3. 性格特性形容語再生率の分析

性格特性形容語再生率（肯定・否定）と抑うつ群（非・傾向），不安群（非・傾向）の２要因分散分析を毎に行った結果，抑うつ・不安傾向により偶発再生した性格特性形容語の肯定語，否定語の再生率に差はみられなかった（F(1,21)=.36,$n.s.$；F(1,21)=.01,$n.s.$)。

3-2-4. 自己関連語内再生率の分析

自己関連語内再生率の平均値と標準偏差をTable1に示した。自己関連語内再生率（肯定・否定）と抑うつ群（非・傾向）の２要因分散分析を行った結果，有意な交互作用がみられた（F(1,21)=20.34, p<.01)。単純主効果の検定を行った結果，肯定語において非抑うつ群は抑うつ傾向群より有意に高かった（F(1,21)=8.27, p<.01)。また，非抑うつ群の自己関連語内再生率は，肯定語が否定語よりも有意に高かった（F(1,21) =15.51, p<.01)。(Figure3)

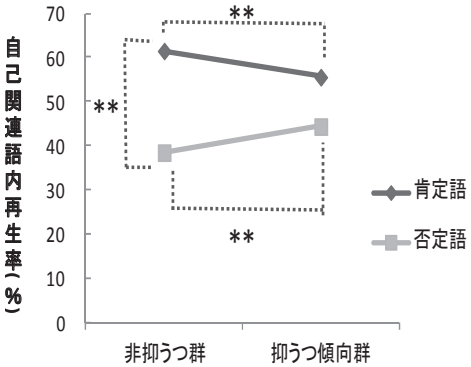

Figure3　自己関連語内再生率の抑うつ群別比較
**p<.01

自己関連語内再生率（肯定的・否定的）と不安群（非・傾向）の２要因分散分析を行った結果，有意でなかった（$F(1,21)=.24, n.s.$）。以上の結果として，自己関連付けした語に関して非抑うつ者は肯定的な記憶バイアスを示し，不安にはいずれの記憶バイアスもみられなかった。

４．考　察

性格特性形容語得点の分析により，非抑うつ者および非不安者にポジティブな自己認知バイアスが検出された。一方，抑うつおよび不安傾向者にネガティブな自己認知バイアスはみられなかった。非抑うつ者にポジティブな自己認知バイアスがみられ，非臨床の抑うつ傾向者においてバイアスがみられないという結果は鳥丸（2009）を追認しており，非不安者のポジティブな自己認知バイアスの確認は本研究で得られた新しい知見である。抑うつ・不安傾向ともにネガティブバイアスがみられなかった理由として，実験参加者が非臨床群の大学生であり，抑うつ・不安得点自体が低かったためであると考えられる。

偶発再生数，性格特性形容語再生率，自己関連語再生率の分析から，抑うつ・不安傾向によって記憶量や再生する意味内容，自己に関連した語の再生率に差はないことが示唆された。自己関連語内再生率においてのみ，非抑うつ者にポジティブな顕在記憶バイアスがみられた。非抑うつ者にポジティブ顕在記憶バイアスがみられ，非臨床の高抑うつ者に自己関連情報のネガティブ顕在記憶バイアスはみられなかった。この結果は坂元・坂元（1998）の研究を追認した。

一方，自己関連語内再生率からも不安傾向によるバイアスはみられなかった。非不安者にポジティブな顕在記憶バイアスがみられないことは本研究での新しい知見である。不安傾向者におけるネガティブ顕在記憶バイアスがみられないとの報告は多数されており（Derry & Kuiper,1981），先行研究の頑健性を高める結果となった。

今後の課題として，顕在記憶バイアスと同様に抑うつと不安に差異がみられるとされる潜在記憶バイアスについてもポジティブおよびネガティブの両面から検討すること，臨床的なうつ病性障害と不安障害の認知との比較を行うことが必要である。

参考文献

Beck,A.T., Stree,R.A. ,& Brown,G.K.（1996）.（訳） 小嶋雅代・古川壽亮（2003）. 日本語版 BDI- Ⅱ　株式会社日本文化科学社

Dannion,J.M., Kauffmann,M.F., Grange,D., Zimmerman,M.A., & Greth,P.（1995）. Affective Valence of words, explicit and implicit depression. Journal of affective Disorders,34,227-234.

Derry,P.A.,& Kuiper,N.A.（1981）. Schematic processing and self-reference in clinical depression. Journal Abnormal Psychology,90,286-297.

福井至（2002）. 抑うつと不安の関係を説明する認知行動モデルの構築と検証　風間書房　2-16.

肥田野直・福原眞知子・岩脇三良・曽我祥子・Spielberger,C.D.（2000）. 新版 STAI 特性不安尺度　実務教育出版

西口雄基・丹野義彦（2012）. 抑うつ的注意バイアスに対する刺激の自己概念関連性の影響　パーソナリティ研究 ,21,91-93.

坂元桂（1998）. 抑うつ者および高不安者の否定的情報に対する潜在記憶　性格心理学研究 ,6,71-81.

坂元桂・坂元章（1998）. 抑うつ傾向と自己関連情報の顕在記憶　性格心理学研究 ,7,46-47.

寺澤孝文・上田紋佳（2011）. 高不安者の否定語に対する推測バイアスの検討　パーソナリティ研究 ,20,53-56.

鳥丸佐知子（2009）. 軽度の抑うつ者における認知心理学的研究　風間書房 55-83.

Explicit memory bias for negative and positive information in depression and anxiety

A previous study indicated that explicit memory bias for negative information processing affected occurrence and persistence of depression. This study investigated the explicit memory bias for negative and positive information in both depression and anxiety. Results were as follows: (a) Both non- depressed and non- anxious people showed positive memory bias; (b) Only non- depressed people showed positive explicit memory bias of self traits. These findings suggested that mildly depressed and anxious people showed unbiased information processing on explicit memory tasks.

Keywords: explicit memory bias, depression, anxiety, self-referential memory task, incidential memory retrival task